

さまよえる日本人

何処へ……………

何処に……………

「石黒健治作品集」第三巻《さまよえる日本人》より
第一巻 広島 HIROSHIMA NOW 深夜叢書社発行中



意外にも告白は本当だったのですよ
長い午後の坂道をころりゆくのは
夢のように<時>を持たない、故がり
顕微鏡の中で殺人鬼は確かに発酵してゆきました。
よそ見をすると周囲は暗闇でした。
別れた懐中時計は机の上で間に耐えています。
眼にはラシブが必要なのに途方にくれて眠くさなってきました。
闇の中を黒檀色の鳥が一匹飛んでいます。
誰も気が付きません。
凍てついてしまった生の中から憎しみの<愛>をたんねんに選って、
ろくじょうのピンにかざったのです。

意外にも告白は本当だったのです。
殺人鬼はやはり捕えられるのです。
塗りつぶそうとした<風景>に、
殺人を防ぐものは遠近感だったのですから。

閉ざされた<私>はいつの日く >をはずして、私一人たちにな
りえるのであろうか。

'67年秋、<私>は<あなた>とは決して単純移動などではしな
いと承知の上で、<私>である<あなた>を求めて街へ溢れ出して
いった<私>。'67年、10・8、11・14 '68年10・21 '69年1・17・18 etc。
一体<私>はそこで何を見ただけであらうか。<情況>あるいは<風
景>こんなものは見やしない。いつも、どこでも、唯一人影を落として
歩いている<私>に出会っただけなのだ。

ずるずると押し流されてゆく日常的<時間>=<空間>の侵食性は、
もうほとんど<私>の下半身を犯すくし、勃起もせず、此処から逃
走してしまうこともできずに立ちすくんでいるだけなのだろう。もし、
新宿を<街>として夜な夜な散歩してみれば解るであらう。そのどの
顔も、そこに産まれ、育ったものではないことが、かといって彼等が
存することが不自然なわけではない。きっと彼らは<都会人>の顔をし
ている筈である。なぜならもはや、都会とは地方であり、地方とは都
会のイメージにしかすぎなくなっていたからである。これは
60年代における地方人口の都市への流入に考察を与えればよい。す
なわち、結論からいえば60年に確立された<都市文化>というものは
全く、<農村の崩壊>によって、もたらされたということになる。
都市文化の情報手段の発達により、農村、辺地への波及にばかり注目
するばかりではなく、その往復作用としての都市文化の形成そのもの
が<崩壊した農村>によって都市に流入した<農村人>によったもの
であるという事実に着目しなければならない。

それ故、彼ら<都会人>=<私>は決して60年初頭の人々のごとく、
北へ回帰してゆく夢を追ったりはしないのである。彼らには真紅なハ
マナスも、遠い遙かなオホーツクも極北への志向などでは決してなく、

そんなものは昭和館のスクリーンの向う側にしか夢みることはできな
いのだ。何故なら、彼らには帰るべき<故郷>はあの北国の農村では
此処だけになってしまったからである。

例えば<演歌>であり<怨歌>である。これらは等しく、農村から
出てきたものが、その出身地への回帰ではなく、<都市>そのものへ
<故郷>を求めて彷徨う都市ブルースでしかありえないのである。集
団就職組の中から森進一が生まれ、より薄幸な上京組（出稼ぎ）から
生まれたのが藤圭子であったのだ。

むろん、森進一も、藤圭子も<私>そのままでもなく<あなた>
からも縁遠い。しかし、彼らは<私>の幻像を内含しく<私>である筈
の<あなた>の怨念を噴出しているといっよよいのであろう。ただ、
<私>はその怨念を全て発掘してしまふことも、それらの象徴として
のスターの美声に溶解してしまふこともない。

<私>自身を無限に軽くし、羽毛のごとく天空へ舞い上るフリーズ
があったら、それを一言だけ手に入れたい。もし、その為だったら、
ひよっとすると、命を賭けることも可能になるだろう。この窒息しそ
うに重く僕の口にしかかってくる<日常>もしくは、<時間空
間>という名の呪縛。これを解き放つことはこの脆弱な肉体の僕にとり
とても可能とは思われない。「わが肉体は私のパレード」などには
決してなりえないのだ。<都会>という名の近代にからめとられて
しまった<私>の肉体は、果たして「我が意識の遊歩場」たりうるの
であらうか、わが<頭>は都会の片隅で騒ぎ出し、一気に噴射し、こ
の肉体を突き抜け、地の果ての影の世界まで一気に飛翔するであらう
か。

彼方への遠い夢への飛翔は、<此処>に存る<私>の存在論と、戦
略戦術によって開始される。全ての<私>である<あなた>の<時間、
空間>に向って。

——<羽田闘争>や<私の表現>と共通の限界をもつ、さまざまな
<情況>を、潜在する全ての時間=空間から発見し、いや創りだして
いくこと。そして、>が占拠する領域を可能な限り拡大していき、
この<世界>を<占拠>すること。この進み方を阻止する力と持続的
に対決すること。このとき、あるいは無数の< >における共通の限
界ものりこえられるのではないか。誤りを怖れずにいえば、この方向
が私の意図や共有の場にもたらすべき目標から歪曲しているとしても
その歪曲した領域の極限に私の本当の<敵>（共同性や非共同性の問
題を含めて）と対決する戦場が、そして<遠い夢>のようにこちらの
模索する手と対応して<敵>を包囲する<手>がみえてくるのである。
（松下昇「情況への発言<あるいは>遠い夢より」）